

大雪山国立公園 表大雪地域 登山道維持管理部会 議事概要

日 時：令和2年12月18日(金) 13:00～16:00

場 所：東川町農村環境改善センター ホール

出席者：資料のとおり（出席者のうち、大雪と石狩の自然を守る会 竹田氏が欠席。公益社団法人日本山岳会北海道支部 藤木氏がWEB参加へ変更）

1. 開会

■ 大雪山国立公園管理事務所長

- ・ 大雪山国立公園連絡協議会を新たに官民連携の協働型管理運営組織に拡充・改組する大きな流れの中で、登山道に関わる皆さんには登山道情報交換会をどのように発展させていくか、平成29年度末に議論を開始した。その後、平成30年度の春と冬、令和元年度の春と冬、長く議論を重ねてきた。そして令和元年度の冬には大雪山国立公園連絡協議会の登山道維持管理部会として実施していくこととなった。これまで情報交換会にご参加頂いていた皆様、特に民間の皆さんには登山道維持管理部会へ参加することに関して各団体に持ち帰ってもらい、それぞれ検討してもらい、参加表明をいただいた方に今、お集まり頂いている状況。本来であれば、令和2年6月に発足させたかったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、その時は新型コロナウイルス感染症対応のためのオンライン会議となった。そして、本日ようやく、第一回の立ち上げ部会の開催に至った。登山道関係者の情報交換を目的とした今までの情報交換会は役割を終え、今後は登山道維持管理部会として登山道の課題解決をするための場が変わっていく。ここに集まる皆さんは、登山道の維持管理、利用に関わる人たち。それぞれで知恵を出し合い、取組を進めて、総延長約300kmとも言われる大雪山国立公園の登山道の荒廃がなくなることを目指して頑張っていきたいので、よろしく願いしたい。

2. 議事（1）登山道維持管理部会の設立について及び議事（2）登山道維持管理部会の運営について

- ・ 大雪山国立公園管理事務所長より資料1及び資料2の説明。

（質疑応答）

■ NPO アース・ウィンド

- ・ 構成員の意味は理解できたが、オブザーバーで今回の会議に出席している人は何%か。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 今回、オブザーバーは、11団体中、4団体が参加している。

3. 議事（3）新型コロナウイルスへの対応を含む各種団体の活動状況について

- ・ 各団体から提出のあった今年度の活動予定については資料3に取りまとめ、会場内の環境省、上川中部森林管理署、上川総合振興局環境生活課、NPO 法人かむい、NPO 法人大雪山自然学校、山樂舎

BEAR、層雲峡ビジターセンター、大雪山国立公園パークボランティア連絡会、北海道山岳ガイド協会表大雪支部、大雪と石狩の自然を守る会、(以下、WEB 参加) 上川南部森林管理署、富良野市、上川町、東川町(旭岳ビジターセンター)、美瑛町、上富良野町、NPO アース・ウィンド、合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊、大雪山倶楽部、山のトイレを考える会、北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺悌二教授、北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授から説明が行われた。

- ・ 資料に記載された内容の他に補足説明がなされた内容や資料提出がなかった団体からの発言は以下の通り。

■ 上川中部森林管理署

- ・ 登山道整備の取組として黒岳、赤岳、トムラウシ、朝陽山歩道において、請負事業により刈り払いを実施。グリーンサポートスタッフによる黒岳、赤岳、緑岳方面の登山道維持管理、登山者へのマナー啓発活動を行った。

■ 上川総合振興局環境生活課

- ・ 毎年行っていた登山道補修イベントは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止とした。
- ・ トイレが新型コロナウイルス感染源になる可能性があるため、黒岳トイレの使用方法を変更した。設置者は北海道であるが、上川町が事務局である上川地区登山道等維持管理連絡協議会で決めた。通常4ブースのところ、2ブースにし、通常トイレは洋式だったのを和式にして残りの2ブースを携帯トイレブースにした。今年度の協力金は500円とし、携帯トイレの販売額を合わせる形にした。反省点・課題も多かったが、次年度は、新型コロナウイルスの感染状況にもよるが、協議会の中でトイレの形態や額等検討していきたい。上川町も同じ意見で良いか。

■ 上川町

- ・ 次年度の対策も含め、上川総合振興局環境生活課のご発言の通りで良い。

■ NPO 法人かむい

- ・ 環境省の補助事業を活用し、大雪山全域のササ刈りと倒木処理を行った。作業箇所の選定は、かむいが独自に登山者の声を拾い上げ、要望の多い場所を優先に行った。補助金事業の趣旨は、ガイドコースを整備し新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから、客を誘致する観光対策であり、また新型コロナウイルス感染症により仕事が激減した山岳ガイドの雇用確保であった。かむいとして何が出来るか考え、大雪山で廃道化している登山道のササ刈り、倒木処理を行う維持活動及び、上川町周辺の遊歩道の整備を行う内容で補助事業の応募を行い、選考に通った。ササ刈り、倒木処理の総延長距離は100kmを超え、大雪山の登山道が300kmと言われるうち3分の1の作業を行った。30名ほどの山岳ガイドや山小屋管理人など、新型コロナウイルス感染症で仕事が減った人の雇用の確保ができた。遊歩道の整備も愛山溪の雲井ヶ原湿原のササ刈り・木道の約半分、50基程敷設した。双瀑台の一部朽ち果てて通行止めになっていた歩道は全線丸太を使用し、土留め・段差工を作り、通行可能にした。

- ・ 東大雪では、ウペペサンケ山、十勝岳新得コース、東ヌプカウシヌプリ、駒止湖、東雲湖、クマネシリ山群など多岐に渡ってササ刈りなどを行った。今回の補助事業では、かむいが独断で整備ルートを選定しており、行政からの指示ではないため誤解のないようお願いしたい。ヌプントムラウシのササ刈りをしたのは、今年度クチャンベツが解放され、沼ノ原経由でヌプントムラウシに行くことを想定した。ネット検索したところ小屋も温泉も無事であるため、クチャンベツから入山し、ヌプンの山小屋に泊まる温泉ツアーを企画することを、かむい独自で考えた。このことは、環境省に提出した特別保護地区内木竹の伐採許可申請書の理由書にも明記をした。ヌプン林道の復旧を期待しているものではない。沼ノ原山山頂までは獣道があり、山頂を踏めることが確認できたのでそこまでのツアーも魅力的であると感じた。
- ・ 今回の補助事業については応募後、採用までに時間がかかったため、対象にならなかった沼ノ原～五色岳区間は、かむいボランティア事業に切り替えて作業を行った。層雲峡本流林道が今年解放されることは、関係者なら昨年度からわかっていたと推測するが、誰も手をかけることなく登山道が解放され、かなり問題があると感じている。林道解放後、確認のため下見に行ったが一般登山者が歩ける状態ではなかった。すぐにササ刈りの許可をいただきたいと動いたが、事業執行者がいる区間にも関わらず、許可や承認・受理がされるのに時間がかかった。
- ・ 双子池～三川台はハイマツ伐採の許可は取れないので、ハイマツをくぐり抜け、ササ刈りをした結果、5泊6日かかった。俵真布林道から入山しクロス縦走でササ刈りをしたいと事前に考えていたが、森林管理署に確認したところ林道状況が解らないので使わないでほしいと言われたため、美瑛富士から入った。俵真布コースに関しては、三川台のルートを使うことに関して、エスケープルートとして重要なポイントだと考えているので、是が非にも開通させたいと考えている。三川台に関しても野営指定地にして欲しい。
- ・ 現在、通行止めになっている愛山溪滝コースは2年連続ササ刈りをした。村雨の滝手前の崩落箇所を観察したところ、変動なく安定しているが、依然として解放する考えはないようだ。維持管理の問題、崩落の危険性など色々問題はあと思うが、以前から事業執行者に対して維持管理は、かむいでやるので何とかしないかと相談している。あとは取り巻く行政の後押しが必要。大雪山グレードを3から4に引き上げるなど対策を取って解放する道を模索して欲しい。
- ・ 今回、全域のササ刈りをしたが手続きが問題だった。これからは高根ヶ原メイン縦走路のハイマツ刈りが問題になってくると思う。事業未執行で許可を取るために相当な労力が必要だと思うので、スムーズに申請が取れる形が作って欲しいことと、部会ができたので全てを取り決めて、ササ刈りや植物の伐採に関しては10年、20年先までスケジュールを作成して、許可申請などは部会で数年先まで許可を取っていつでも作業できる体制にして欲しいと強く望む。

■ NPO 法人大雪山自然学校

- ・ 旭岳ロープウェイの運休期間が長かったので、姿見の池園地の管理期間が例年と変わったが、その間他の登山道の草刈りを行った他、ロープウェイに乗らない人がどう動くのか考えながら作業した。感染対策を取決めて実施し、安全対策や維持管理をおろそかにしないように活動した。例年と変わったのは毎年ボランティアを毎週末受け入れて作業していたが、参加希望者の方には隔離期間を設けてもらい、1週間～3ヶ月で長期間参加してもらった。

- ・ スタッフにイギリス人、アメリカ人がいたので、英語表記を検討した。携帯トイレや携帯トイレブースは外国の方には意味が伝わりにくく、disposal bag や waste bag だとただのゴミ袋に思われているようなので、携帯トイレは mobile toilet bag、携帯トイレブースは booth for using mobile toilet bag という訳を旭岳では使っていこうと思っている。他の地域で携帯トイレの英語表記を決めているところがあれば聞いてみたい。

■ 山樂舎 BEAR

- ・ 例年に比べてほぼ活動していない。勇駒別集団施設地区の誘客推進事業に協力し、第一天女ヶ原やロープウェイ裏の腐った木道の付け替え作業をした。また、第一天女ヶ原がここ 20 年ほどの間、湿原からササ原へ景観が変わりつつあるため、景観の復元を考えた方が良いと感じた。登山道の維持という観点からは木道の更新は重要であるが、登山道が排水路として機能してしまい乾燥化が進んでいる。湿原は本来水が排水されず涵養されるから湿原である。すぐに湿原のササを刈るのは問題があると思うが、景観がどう変わっているかのデータ集めをしたら良い。

■ 層雲峡ビジターセンター

- ・ 登山情報発信、自然観察会の開催を行った。新型コロナウイルス感染症対応としては、北海道スタイルや層雲峡スタイルを基準に、換気をしたり、いつも以上に多く清掃をしたりした。インバウンドは来ていないし、一般のお客さんの来館者も少ない。観察会はこれまで参加していた高齢の方は、今年度は来ず、少ない人数で実施をしていた。基本的なセンター利用や国立公園の利用を含め、室内ではなく、今後数年は屋外活動を中心にやっていかないといけないと感じた。

■ 大雪山国立公園パークボランティア連絡会

- ・ 現在、会員数は 100 人程度いるが、6 月～10 月のシーズン中、23 行事、43 日間、延べ 350 人の参加だった。登山道関係行事は 6 月十勝岳、旭岳、9 月愛山溪、十勝岳、旭岳を実施した。新型コロナウイルス感染症対策のため 5 月総会は中止としたが、それ以外の行事は概ね密を避け、ソーシャルディスタンスや密を避ける声かけなどしながら実施した。

■ 北海道山岳ガイド協会表大雪支部

- ・ 維持管理活動は行ってないが、公益社団法人日本山岳ガイド協会において、特別委員会コロナ対策プロジェクトチームが発足し、ガイド事業再開に関する 4 ステップが作成され、北海道山岳ガイド協会に所属しているガイドはそのステップに従うようお達しが出た。先月末はステップ 3（解除拡大）だったが、今はステップ 2（限定解除）に移行し厳しくなった。ガイドレシオが出ているが、基本的なことは通常対応している人数の半分でツアーを行うこと、消毒・喚起、ソーシャルディスタンスを意識して事業を行っている。

■ 大雪と石狩の自然を守る会

- ・ 具体的な登山道維持はしていないが、啓蒙活動として大人のための自然学園、大雪山をフィールドにしたヒグマ大学を開催している。環境省はじめ皆さんが整備して下さっている道を使わせてもらっ

ているが、登山道のことのみならず全般について見たり感じたりしたことについて話し合いをしている。大学なので2年講座であるが、2年間大雪山を見て自然を学び、将来的にどうするか考えてもらう。トイレ問題、登山道、施設の老朽化など将来的に利用をどうしていったらいいか啓蒙活動をしている。

■ 上川南部森林管理署

- ・ 例年通り、グリーンサポートスタッフによる十勝岳、富良野岳、原始ヶ原啓蒙活動。踏み荒らし防止によるビニールテープ、ロープ等の設置をしている。

■ 富良野市

- ・ 新型コロナウイルス感染症対策のため春先の山開きは関係者のみの開催とした。
- ・ 今年、インバウンドの登山者が少ないが、今まで山に向かわなかった人、山の経験の浅い方も今年に入山していたこともあり、標識看板を秋に見直し、手作りの表示板に付け替えをした。行政と山岳会の情報共有が遅れ、一部は表示の英語対応ができてなかった。
- ・ 環境省の補助を受けて、登山道の再整備としてガイドの方が中心に夏～秋にササ刈りをした。

■ 上川町

- ・ 上川地区登山道等維持管理連絡協議会の事務局として、黒岳トイレの維持・運営を実施。黒岳トイレは、今までと同様の利用ができなければ厳しい状況にあるので、新型コロナウイルス感染症防止対策について関係機関の北海道、環境省、実際に作業にあたるりんゆう観光、NPO 法人かむいと対応について何度も協議を重ねてきた。関係機関の皆さんのご協力によって、感染者を出さないための取組として、特に大きなトラブルなくトイレを使用できた。今回の取組によって来年の課題も見えてきたので、来年どうしていくか皆さんと協議をして検討していきたい。

■ 東川町（旭岳ビジターセンター）

- ・ 7月に第一回大雪山フォーラムを、二日に分けて開催。一日目が大城和恵さん、村上富一さんをお招きし、大雪山登山における新型コロナウイルス感染症対策を取り上げた。登山ですれ違う際に、バフや手ぬぐいハンカチで口元を覆い挨拶をすることなどが取り上げられた。二日目は地元のガイドさんによる、新たなガイドツアーについてパネルディスカッションを開催した。
- ・ 環境省の誘客推進事業の補助金で、天女ヶ原登山道のボロボロの木道を撤去し、地元の高校生の協力を得たりして、木道を敷設し直し、だいぶ歩きやすくなった。
- ・ 観察会やガイドツアーは人員を制限しており、新型コロナウイルス感染症対応としてツアー開催前には参加者に健康チェック表を記入してもらっている。

■ 美瑛町

- ・ 白金観光センター前の公衆トイレを今年度改修し、そこには、携帯トイレの回収ボックスも設置している。改修したトイレは来年使用できる予定。

■ 上富良野町

- ・ 通行規制をしていた三段山登山道の開通を行い、その注意喚起の看板を設置した。

■ NPO アース・ウィンド

- ・ リサーチ登山花ボランティア活動の中で調査目的の登山道利用者としての報告をする。2020年は5月25日から始める予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、自粛し6月から始めた。温暖化データ収集のモニタリングサイトセミナーという名目で募集し、新人研修のため黒岳、赤岳の調査地4カ所に登った。延べ67名の新人が育成された。環境省のモニタリングサイト1000の高山帯部門に掲載されているので詳細はそちらをご覧ください。新人の居住地は、旭川、岩見沢、士別、函館と様々だったが、大雪山は登山したことないが、花を見たい人や、温暖化でどれだけ生態系が変わっていくのか知りたい人たちがほとんど。20年やっているので、記録回数は初年度は6枚くらいだったのが、2020年は、有効調査数は230枚になっている。他の調査地の北アルプス、富士山、立山など5カ所は、本州は立山を除いて標高差1000m登らないと行けないところに調査地があるが、大雪山はアクセスしやすい調査地であるため貴重な記録が多く積み上げられている。調査地には今までなかった新芽が出ているが、温暖化の影響というのもわかってきている。調査地は特別天然記念物地域であり、私たちのグループでは3名しか立ち入れない。小さな花が開花しているか、ツボミをつけているか、それを見分けるために双眼鏡を使ったり、立入許可者に見てもらったりしている状況のため、来年度は立入許可の人員を10人に増やしたい。調査地に入る場合は、長靴、沢足袋、靴下、ビーチサンダルなどインパクトが少ないものにしていく。
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策としては、乗用車の同乗する際の人数制限や、マスク着用、検温、消毒し、朝7時に歩き始めると下山者もそれほど多くなく、すれ違うことがほとんどないため、マスクを外してソーシャルディスタンスを保ち歩いた。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊

- ・ 例年と比べ作業が減ったわけではないが、登山者を集めてのイベントは形を変えて行った。東川愛護少年団の活動、白雲岳避難小屋の管理、登山道巡視、トムラウシの調査の他、間宮岳整備が3年かけて一段落し、ヒグマ情報センターの中でできることを行った。ヒグマ情報センターでは、整備、情報発信、トイレの管理、ボランティアをお願いして色々なことをやった。今年は新型コロナウイルス感染症対策をしなければならないため、マスク、シールド、アルコール、換気などをした。山守隊のイベントは、今年も色々な人からやりたいと声をかけていただいたが、「やります。来てください。」とは言えなかったのが、どれだけ分散できるかをテーマに活動した。結果的に7~9月まで荷上げボランティアを分散して募集し、日々2~3人程度だが、トータル151名の荷上げができたり、「日曜日に整備をするので手伝って下さい。」とFacebookで声かけして10~30人弱くらい来てくれた。多くの登山者が整備に関して意欲的になってきている。ヒグマ情報センターの入山者は4000人を切った。去年は6054人、今年は3864人。去年より2000人減ったが、9月に4000人程度来ていたのが、2000人程度に半減している。お客さんは減ってしまったが、大型バスツアーがなかったため、20人程度の規模のツアー団体はなく、多くて10~15人くらいの団体が沼めぐり登山コースを歩いて、渋滞が起きないので登山者から非常に好評だった。一日の入山者が多いときで400人なの

で、すごく減っているわけではない。今後の歩道の利用については、大型ツアーは少なめに、より距離を保った小さなツアーが良いということ発信できると思う。今期良かったのは、どさんこワイドやNHK、ケーブルテレビなどのメディアが色々な形でヒグマ情報センターを取り上げ、情報発信できたことで次に繋がると思う。

■ 大雪山倶楽部

- ・ 新型コロナウイルス感染症への対応として、マスク着用、ソーシャルディスタンスの確保を進めてきた。旅行会社のツアーは、近年、ガイドがマイクをもち、参加者に無線で飛ばすイヤホンガイドを用いているのである程度、新型コロナウイルス感染症対策になっている。お客さんの入り込み状況は、GO TO キャンペーンの関係、また海外に行けない関係で北海道にかなりの数に来て、私どもの団体は、紅葉期は例年通りの客数だった。ただし、今後冬季の入り込みは大幅に減少している。
- ・ 携帯トイレは、お客さんの方から「大雪山は携帯トイレ必要ですね。」と事前に確認いただくこともあり、ガイドが準備して持って行く形で携帯トイレの認知が進んでいる。
- ・ 銀泉台は今年10月1日に林道通行止めになったが、温暖化の影響で紅葉が遅れ、今年は9月末くらいがいい紅葉だった。私どものお客さんは95%以上が本州の方で、日本一早い紅葉を見に層雲峡に泊まって銀泉台に行きたいが10月1日以降は行けなかったのも、関係部署で考慮して欲しい。銀泉台が通行止めになると、層雲峡紅葉谷にご案内するが、紅葉谷登山道は滝までが急峻で一般観光客には厳しく転倒する方もいるので、整備を前向きに検討してもらいたい。

■ 山のトイレを考える会

- ・ 新型コロナウイルス感染症のため2020年3月のトイレフォーラムは中止した。
- ・ 美瑛富士トイレ管理連絡会として美瑛富士携帯トイレパトロールを全6回実施した。
- ・ 裏旭野営指定地の携帯トイレブース設置に向けた現地調査を、7月に一泊で4人で実施した。その時はテントが28張りが多かった。12人に聞き取り調査が実施できたが、その中で携帯トイレを持参しているのは11人だった。ここは隠れる場所がないので、どこで用を足しているのか聞き出したかったができなかった。来年は母数（調査対象者数）を多くしたいと思っている。
- ・ 環境省東川管理官事務所が行っている美瑛富士携帯トイレに関するアンケートでは、美瑛富士の登山者の中で携帯トイレを所持率は76%、日帰り登山者は所持率は少ないが、宿泊者は95%の所持率の結果だった。

■ 北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺悌二教授

- ・ 例年通り、ドローン、ポールフォトグラフィを使い、黒岳石室付近の登山道調査、北海平や黒岳野営指定地の現サイトと旧サイト、裏旭野営指定地で調査し、現在解析を進めており、年度末までにフィールドバックしたい。また、資料1-1にある環境省が作成している登山道維持管理実施手順マニュアルのデータベースにも関わると思うが、資料5-4の野営指定地の将来の維持管理について年度末までに、関係者と議論する場を設けさせてもらいたいので、ご協力お願いしたい。

■ 北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授

- ・ 大雪山・山守隊で植生マットを施工した場所の効果の調査をした。また、裾合平・沼ノ平・南沼に許可を取った上でペグを設置し、数年かけて調査していくが、現地にペグを設置しているので関係者の皆様に周知させていただく。植生マットを施工した裾合平はチングルマの実生個体が増えており、特に3, 4年経過した場所では多く見られる。雲の平ではコケ類、イワブクロを確認している。
- ・ 新型コロナウイルス感染症への対策として、環境省が設置している登山者カウンターデータのうち過去3年分を用いて曜日の並びを見て、何日頃が混みそうか混雑予想カレンダーを作成した。このような予想カレンダーは富士山などでも行われている。今年も入山者数データをいただき、検証していく。
- ・ リポートフォトグラフィとして東川町大雪山アーカイブスにある昔の写真と現状の写真を撮影し比較する調査を行った。自然景観と利用状況の変化を調査するもの。自然景観は国立公園で守られている場所に関しては大きな変化はない。さきほど天女ヶ原でササが増えているという話もあったが、植生変化を解析することにも使えるため、来年度はポイントを増やし解析をしていきたい。

(質疑応答)

■ 山樂舎 BEAR

- ・ 今年度開通した松仙園について、四ノ沼の登山道が以前と違う場所に着いている。以前はケルミ・シュレンケ複合体の核心部に道がついていたが、山裾に付け替わっている。湿原の保護を最優先にすると思うが、湿原が遠くて見にくくなっている。また、つけ代わったばかりなので、そのうち裸地化していくのだと思うが、現在は高山植物を踏みつけながら歩いている。登山道の選定の経緯を教えてもらいたい。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 四ノ沼のケルミ・シュレンケ複合体は、人為的影響が極めて少ない貴重なものであると、佐藤謙先生や北海道大学の富士田先生から評価とご助言をいただいた。これら有識者の方のご意見を踏まえて従前のように湿原の中は通らず回避することが必要と判断し、南側の山の斜面を通り上から見下ろすルートにさせていただいた。新しいルートであるため、植物について注視して管理していく必要があり、モニタリングを行っていきたい。

■ NPO アース・ウィンド

- ・ 雪解け時期だと登山靴が水没するので、広報するときに長靴履いたり、装備を変えて下さい、といった案内が必要。木道が敷設されているのは湿原を荒らさないという意味でも良いし、一方通行だとすれ違いがないのは良いことだと思う。ただし、5~6人で行くと立ったまま飲料水を飲むのではなく、座って休憩したい人もいて、休憩するときは木道から外れて休憩しないといけない。休憩地として広い部分は必要。すれ違いがない状態で守られているとは思いますが、登山の楽しみの一つとしてすれ違い時に挨拶を交わしたい。このまま一方通行がずっと続くのはいやだなと感じている。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 湿原植生の保護を最優先として、ルールを設け開通させた。登山者の皆さんから様々な意見があるの

は承知しているが、新しいルートをつくったばかりなので、まずはこのルールをしばらく運用していきたい。休憩場所は登山口から斜面を上がりきった知る減の入口のところに、休憩場所として利用できる広い場所があるので、そこを広報していくことが重要と感じた。

■ 北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授

- ・ さきほど報告の中で、松仙園は想定より登山者が多かったという話があったが、実際どれくらいの人数が入ったのか教えてもらいたい。また、一方通行にしているが逆方向からの入山はどれくらいいたのか。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ まだ集計中であるが約 1000 人の入山（※注：集計結果 1015 人）。確定したら環境省の HP「大雪山国立公園における登山道利用者数調査」に掲載する。登山者カウンターを設置したが、場所が適当ではなかったため、上手く計測できなかった。予備として設置したトレイルカメラにより、正確な人数を計測できており、逆方向から下りてきた人は 2~4 人だったように思う。（※注：集計結果 7 人）、真夜中に下ってくる特異な人もいたことを考えると、概ねルールは守っていただいていた。

■ 北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授

- ・ NPO 法人かむいや東川町天女ヶ原のササ刈りなどは環境省の補助金事業でやっているが、実際には実施される方と環境省、登山道の事業執行者のコミュニケーションはどれだけあったのか。コミュニケーションが足りなかったと感じている。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 今回の補助金事業は、事前に自然公園法の手続きがある場合は、各担当事務所の管理官と調整することと、その他関係法令手続きがあるときはそれを確認して実施することが申込時の条件だった。事前にご相談いただいて許可申請が必要な場所はその手続きを実施していただいた。ツアー実施のための環境整備が目的とした補助金であるという性質もあり、手続きが必要な箇所について許可申請がなされた場合にはすべて処理、対応させていただいた。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊

- ・ ヒグマ情報センターは去年、募金箱を設置して、約 4000 人に声かけして 30 万円が集まり、木材を買い、50 基以上の木道を作ることが出来た。今年は登山者少なかったが 2500 人に声かけをし、64 万円集まった。集まった募金は一端、上川地区登山道等維持管理連絡協議会にお渡しして、そこから登山道整備に使って良いとなっている。登山者は、整備された内容や発信の仕方など、色々なことを見ながらお金を出してくれているのがわかった。
- ・ 松仙園の刈り払いやその他のササ刈りについて、登山道整備をする側の人間からすると植生が崩れるのを止めたいという思いである。今年は松仙園の入山は 1000 人とのことだが、1000 人歩いただけで非常にぬかるんで、周りの植物が崩れるきっかけになりつつある。今はまだドロドロの状態ではあるが、土が流れ始めたら一気にガリーになり、水路になり、他で起こっている侵食と同じように

なる。トムラウシも年間 3000 人しか上がってないが、ここ 20 年くらいでカムイ天井のあたりは 1 m 以上掘れ、岩盤が出て取り返しの付かないところまできている。ニペソツは去年から昔のルートに戻したら、ぬかるみが激しくなっている。刈り払いをすることは、土壌を守っている植物を刈り取ることになる。そのため、利用者から求められたからという理由だけで刈り払いをするのは少し安易に感じる。どこのルートをどれだけのお金をかけて、誰が管理するのかきちんと決めてから、今年はどういうお金があるからここをやろう、来年はこういう部分が危ないからやろう、いつかまた補助金が入ったらこういうところをやろう、という全体像や長期的計画を決めてからやるべきと強く思う。登山者にとって登れるところが増えるのはありがたいし、登山文化としても良いと思うが、今お金がなく管理できる人がいない、管理者不在のところ泥だらけになってガリーになって木道を設置しようと思っても管理者不在だと木道も敷けない。そういう場所は管理まで考えるべき。利用と保護はバランスよくやっていかないといけない。今回の補助事業の目的は新型コロナウイルス感染症の終息後、人をいれるためだとは思いますが、環境省の監督にかかっていると思った。植物と土壌と管理を考えて大雪山全体でやっていくことを考えるべき。

■ 北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺悌二教授

- ・ 岡崎さんの意見に全く同感。前に他の会議でも発言したが、大雪山国立公園全体で 10 年、20 年先、どういう風に使うのかビジョンを考えて議論した上でスタートしないと、その場その場で行き当たりばったりでやるのはよくない。

> 渡辺先生

このあとの発言が、通信状況が悪く聞き取れませんでした。恐れ入りますが、ここで発言した内容を記入をお願いします。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ ご意見を受け、全ての登山道が事業執行されて管理された状態としていくかが必要と改めて感じた。これに関しては次の議題のテーマとして用意している。

4. 議事（4）大雪山国立公園における登山道の荒廃などの課題の解決に向けた取組

1) 登山道の未執行区間の解消に向けて

- 事務局より資料 4-1 の説明。
- 上富良野町企画商工観光課より資料 4-1 「三段山登山道の事業執行について」の説明。
- ・ 三段山登山道の事業執行をおこなったのが、平成 26 年 1 月で、通行規制を解除したのが、今年の 9 月。
- ・ 平成 21 年 8 月に三段山で大規模崩落があり、登山道の閉鎖措置をとったが、三段山登山道は昔から人気のある登山道で、町として、観光も含めて、多くの方に登山してほしいという思いがあった。当時の登山道は、事業未執行という状態であり、通行規制解除を判断する管理者がおらず、このままでは通行規制解除の見通しが立たなかったため、上富良野町が事業執行者になり、崩落箇所が安定してきた段階で、安全対策を行い、通行規制解除を行うこととした。
- ・ 三段山の通行規制解除後、入山者は以前よりも増加。

- ・ 今後の維持管理は、山岳会に委託する。登山道の維持管理延長が伸びたことや、杭やロープなど安全対策としての管理も増えていることから、来年度の維持管理の予算を増やして、山岳会と町が協力して管理を行いたいと考えている。金額については、これまでの18万程度から、30万弱に増額要望したいと考えている。
 - ・ 通行規制解除までには、多くの関係者にご協力いただいたことに感謝。
 - ・ 三段山登山道は、多くの方に利用されていることが分かったので、今後も引き続き多くの方に登山していただき、また2か所の登山口にある温泉も利用していただけることを期待している。
- 大雪山国立公園管理事務所より資料4-1「白雲岳避難小屋周辺登山道管理強化」の説明。

(質疑応答)

- NPO 法人かむい
- ・ 白雲岳避難小屋周辺登山道管理強化については、協力金作業部会で議論するという理解で良いか。白雲岳避難小屋で集めた協力金は、白雲岳周辺の登山道に使われると言うことで良いか。
- ⇒ 大雪山国立公園管理事務所
- ・ 別途、大雪山国立公園協力金作業部会で協力金に関する議論が行われているが、ここでは大雪山国立公園全体で協力金に対してどう向き合っていくかを議論している。白雲岳避難小屋周辺の協力金のように個別地域での協力金はそれぞれの地域で議論してもらう。そのため、白雲岳避難小屋周辺の協力金に関しても上川地区登山道等維持管理連絡協議会などで地域の枠組みの中で議論し決めていく。白雲岳避難小屋を拠点に登山者の皆さんから協力金をいただいて、それを白雲岳避難小屋周辺登山道に充てていく予定をしている。
- 大雪山国立公園パークボランティア連絡会
- ・ 白雲岳避難小屋周辺の登山道管理について、白雲岳山頂の積雪がすごく多いとき、山頂直下は垂直の壁になっている。数年前、ご夫婦で白雲岳に登っていて奥さんが山頂直下から下山するとき、岩に頭をぶつけて亡くなったという事例がある。積雪期は、手前から白雲岳の壁を巻いて誘導すれば安全に登れるので、積雪期の危険なときは、手前から誘導できるように柔軟に管理してほしい。
- 北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授
- ・ 先ほどの話と重複するが、未執行区間を減らす方向性自体は悪くないが、大雪山グレードに位置づけられている区間やそうでない区間を全て執行する方向で良いのか、中にはこのルートを使うのは難しいというところは廃止もしくは公園計画から落とすことも考える必要がある。それも含めて長期的なビジョンを議論する必要がある。
- ⇒ 大雪山国立公園管理事務所
- ・ 仰る通りだと思っている。登山道のランドデザインは原則として国立公園の公園計画で示されるもの。本来であれば、公園計画に掲載された歩道のうち、実態がある歩道は事業執行をしっかりと行い

適切に管理されるべき歩道であり、実態がない歩道なのに公園計画にある歩道は新たに作る必要があるという意味になる。公園計画とはそういう認識を示したものの。逆に言えば、公園計画に記載されていない歩道は歩道とすべきでないというのが本来の意味。現状はそこが混乱している。

- ・ 今後、登山道管理水準を実態に合わせて改定していかないといけない。登山道グランドデザインをどうするか登山道管理水準を議論するなかで決めていく。そして、登山道管理水準の議論を公園計画に反映させることが必要。これらの点をこの部会でもしっかり議論し決めていくことが必要であると感じた。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊

- ・ 廃道、登山道の復元などについては柔軟な発想が必要。廃道は管理できる体制が整ったら復活させましょう、管理できない体制なら何年間か止めます、という判断ができるようにならないか？愛山溪の滝コースがなぜ止まっているのか誰が判断しているのかどうやったら解除できるのかさっぱりわからない。濱田さんや佐藤やっさんの時代から手をかけてきている。部分的な崩れはあるが登山道崩落という部分は少ないし、これからどうなっていくか基準も出ていない。解除の基準が明確になれば、どういう手段があるかお金をどう動かすかも考えられる。この部会が、柔軟な対応についての議論ができる場になって欲しい。

■ 大雪と石狩の自然を守る会

- ・ 中部山岳国立公園は山小屋が民営で運営されている。小屋の運営者が小屋を利用していただきたいから、登山道や周りの自然環境の知識と意識があり、自らが手を入れている。北海道は営業小屋がなく、商売にならない。避難小屋の協力金は微々たるものだから、本州やヨーロッパの山小屋、登山道管理の状態を勉強してみてもと思う。

5. 議事（４）大雪山国立公園における登山道の荒廃などの課題の解決に向けた取組

2) 誘導標識の現状と老朽化等への対応について

■ 上川総合振興局環境生活課より資料４－２「大雪山登山道沿いの誘導標識改修について（案）」の説明

- ・ 過去に北海道が整備した標識を対象として、老朽化した盤面・表示板を、多言語化、耐久性を踏まえた改修をおこなうもの。令和３年度以降、表大雪地域の表示板を改修し、耐久性等の経過を把握する。
- ・ 改修方法の基本的な考え方としては、公共工事で予算をかけて土木業者に発注するという従来の方法ではなく、ある程度の技術があれば山岳関係者の方でも表示内容の更新が可能な仕様・方法を基本として考えている。
- ・ 具体的な方法は、ラミネートした表示の紙をアクリル板に挟み、腕木に取り付けるという方法を検討している。表示内容については、英語表記のほか、新たなるに現在地の表記を追加したいと考えている。表示内容について、高原温泉にて試験的に実施していただいたため、岡崎さんより紹介いただく。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 資料4-2 8Pの説明

- ・ 今回紹介する表示板の方法は、基本となる案ではなく、苦肉の策としてどうしようもない状態であるため対策したという位置付けである。高原温泉などで登山者を案内する立場として、これからはインバウンドも迎え入れるようになるが、基本の標識が機能していない状況は、大雪山の地元の人間として恥ずかしい。しかし、標識を全て直すとなるとコンサルに発注して調査・設計して数十万かかる、その後、業者に発注し、何基か改修するだけでものすごい費用がかかってしまう。それを、いつまで待ったら全部交換できるのか、見通しが立たない状況であったため、表示板の改修について、北海道に対してアクリル板を用いた方法を提案した。実際に取り付けて、耐久性があるかの検証を本当は一年様子を見たかったが、いきなり来年全部変えるとなっていて驚いている。
- ・ アクリル板案の原型になったのは、沼ノ平にある解説標識。数十年前から立っているが、まだ文字が読める。その表面にはアクリル板のようなものが貼ってあり、アラレなどにも削られないので、現在各所で取り付けられているラミネートより長持ちするのではと考え、試作した。
- ・ 表示内容は、今回は地図・名称の標記を入れ込むことを考えてみた。色々な地域で、地図が入った標識が既にあり、登山者が道迷いしないために地図を見せるのは非常に大事だと思う。現在も、裾合平方面では北海道警察の方が作ったラミネートがあり位置についてはP〇と記載されているが、P〇ではなく、全て地名の表記に変更できないかと考えている。登山者にとってP〇の表記や緯度経度は必要ないので、わかりやすいものだけにしたいと考えている。
- ・ 地図は国土地理院地図を使ったりしているが、The Hokkaido Wilds のロバート・トムソンさんが出している地図が英語表記もあり、非常にわかりやすいので、この地図を使うのがよいと思う。
- ・ 高原温泉では、ヒグマ情報センターの入り口で配布しているマップと合わせた地図を使った。
- ・ 表示板の試作に関して、2種類作成した。アクリル板とアクリル板を張り合わせて標識に設置するパターンと、板にアクリル板を貼り付け、板ごと今までの標識に設置するパターンを考えた。現状の標識には、ボルトが出ていて、ボルト部分を加工しなければならないため、取り付け時に注意し、2パターンを試したもの。標識は、固くて重くて丈夫でまだ使える。表示面について登山者からは今のところ違和感はないと言われているが、今の時点でもかっこわるいと思っている。ただ、中身の表示を変えること、簡単に補修ができること、価格が安いこと、色々なことを考えて現状を改善するのであればラミネートをそのまま張り付けることよりはいいと考えている。これを作るには手間もかかるが、関係者の協力を得られれば取り付けもすぐできると思う。
- ・ 表示内容や文字、工法について皆さんと話しながらかやしていきたいので、良い悪いなど意見を求む。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 設置するにあたり、地図や表示面のアイデアを出してもらいたい、という意味でみなさんの意見を聞きたい。

■ 山樂舎 BEAR

- ・ 一番簡単なのは電波のあるところでは、QRコードをつけておいて、それをかざせば現在地が分かるようになるのがいい。それを推し進めていけば、大雪山でアプリを作って、協力金の話とも連動させ、そのアプリで支払い済証みたいなものも発行でき、白雲岳避難小屋はお金払わないでいいとか、黒

岳トイレも使えるなど、キャッシュレスにするべき。北アルプスの山小屋の中には現金を持たなくても良いように、クレジットカードはもとより、アップルペイも使える施設がある。外国人もしばらくしたら戻って来る可能性があるため、できるだけデジタル化を進めて人の手間がかからないようにしたら良い。

■ NPO アース・ウィンド

- ・ 大雪山グレードのグレードを示すマークは人間がザックを背負っている絵になっている。グレードマップと連動しているのかもしれないが、細かい標識の表示にしては色だけにした方が良いのではないか。言葉が通じない人たちにわかるようにするには、漢字や英語を使うよりも、色やデザインが重要だと思う。登山標識についてはそういうものを見てきた複数専門の人たちとのデザインについて議論するミーティングを開いて欲しい。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊

- ・ デザインが大事、情報交換は大事というのはその通り。耐久性も気になるし、自分はこのまま進めるつもりはなかった。しかし、何とか改善したいという思いがある。QRコードについては、ヒグマ情報センターには電波がないので現状を1つ先に進めるにはこれしかなかった。内容を変更できるようにしたり、民間のアイデアが山に入っていくように持っていきたい。上川総合振興局から関係者に対して意見のとりまとめ依頼などあると思うので、それを聞きつつ進めていけたら良い。ヒグマ情報センターに設置している部分は来年早々お伝えできると思う。

■ 大雪山国立公園管理事務所

- ・ 上川総合振興局から改めて皆さんに意見を求める形で、メールを発出して頂き、アイデアや気がついたことがあれば上川総合振興局に提出してもらおうのはどうか。

■ 上川総合振興局環境生活課

- ・ 今日の話で大きな反対意見がないと捉えた。それを踏まえて、表示内容の具体的な案を検討して意見を聞く形にしたい。

6. 議事（4）大雪山国立公園における登山道の荒廃などの課題の解決に向けた取組

3）ドローンについて及び4）登山道補修技術検討会のお知らせ

- ・ 大雪山国立公園管理事務所より資料4-3、資料4-4の説明。

（質疑応答）

■ 北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺悌二教授

- ・ ドローンについて、英語での申請ができるように今から整備できるようにしてもらいたい。申請書は共通化してワンストップでできるシステムができると素晴らしい。

7. 閉会